

鈴木三重吉の童話作品における一人称代名詞

山田 実樹

1 研究の目的

明治から大正にかけては、「標準語」の制定に関する動きや、明治 37 年の国定教科書発刊等、どのような言葉を使用するかについて注目され、議論されてきた時代であるといえる。祁 (2007) や長崎 (2007) の調査によれば、一人称代名詞も短期間でその使用に変化のみられる形式であり、注目すべきものである。特に江戸・明治から大正・昭和にかけて、東京とその周辺地域で使用されてきた標準語の基盤となった言語では、一人称代名詞の形式は徐々に限定されていっているように思われ、明治から大正にかけての時期は一つの過渡期であるといえるだろう。一人称代名詞は、その使用がある程度慣習化していると考えられるが、文芸作品等の書き言葉資料では大量に使用されており、一見その特徴がみえにくいために、あまり注目されていないように思われる。

江戸・明治の一人称代名詞については、小松 (1987) や祁 (2007) によってある程度調査されているが、大正・昭和については長崎 (2007) の「僕」と「君」等特定の形式について取り上げたものはあるが、まとまった調査と分析・考察はなされていないように思われる。この時期にある一定の資料に基づいて、どのような形式がどのように使用されているのかについて調査・考察されることが、すでに明らかになっている江戸・明治の一人称代名詞の使用状況と、現代共通語の様々な位相の一人称代名詞の間を埋め、変化の過程を明らかにすることにつながると考えられる。

このような問題意識に立った上で、本研究では大正 7 年に鈴木三重吉が主宰となって作られた、子供向けの雑誌『赤い鳥』を資料として調査を行う。『赤い鳥』は、第一期国定教科書から 14 年後に創刊され、創刊号の標榜語に書かれている鈴木三重吉の「子供のために手本となる良い雑誌を作りたい」という理念が反映されていることもあり、教育現場を中心に広く受容される種の規範として子供たちの学習材となった。鈴木を中心に作家たちは一定の言語選定意識を持ってこの雑誌を作っていたと考えられる。したがって、『赤い鳥』の童話には、それぞれの形式が登場人物の属性とどのように結びついているかといった、当時ある程度社会の中で共有されていた言語慣習と、鈴木ら作家によって子供たちが学ぶべき手本として新しく作られたものが反映されていると考えられる。

また、『赤い鳥』以外の資料として、明治 28 年から刊行され、同時代の雑誌である巖谷小波主筆の『少年世界』や、多数の文芸作品が存在する。後者については、計量的調査に有用な電子テキストも多く作成・公開されており、こうした資料の調査によって、現代との比較だけでなく、同時代での比較を行うことも可能である。『赤い鳥』ではすべての漢字にルビが振られているため、その読みが問題となることはなく、特に「私」等多くの読ませ方がされている形式の弁別も可能であるという点でも、一人称代名詞の調査に適した資料であるといえる。

本研究では、『赤い鳥』における一人称代名詞について、形式ごとの使用数や、それぞれの形式がどのようなキャラクターと結びついているかを明らかにすることを目的としている。それによって、『赤い鳥』発刊当時の言語慣習や、鈴木三重吉ら作家によって子供たちが学ぶべき手本として新し

く作られたものも明らかにすることができるだろう。

2 研究の方法

本研究では、『赤い鳥』第一期（1918～1929年）22巻127冊の鈴木三重吉童話作品を対象に、一人称代名詞について調査した。全173話、106作品が対象となっている。表記と漢字のルビから語形を認定し、ルビ欠如等で語形が認定されない用例はみられなかった。形式ごとの表記はさまざまだが、一つの作品中でもその表記は揺れており統一性がないことから、表記の違いについては特に大きな問題でないとみなして、表記の別を問題としないこととした。

さらに、収集した用例を男女別、社会階層別に分け、それぞれの形式を使用している登場人物を類型化してまとめ、考察した。

3 先行研究

まず初めに、一人称代名詞について述べられている先行研究についてまとめておく¹。

一人称代名詞を取り上げているものは、直接には書き言葉を資料としているが、それらの資料は特定の時期の話し言葉を反映しているとみなされているものが多く、特に明治以前の資料を調査対象としている場合には、その傾向が強い。本稿では、小松（1987）、飛田（1974）、祁（2007）、長崎（2007）、山西・山田（2008）、金水（2003、2007）を取り上げる。

小松（1987）は、『浮世風呂』を資料として、女性が使用している一人称代名詞を調査し、その傾向について述べている。『浮世風呂』は銭湯に集まる江戸庶民の会話を基に構成されており、話し言葉を反映した資料とみなされている。

まず、上層女性の使用する一人称代名詞はワタクシ・ワタシであり、ワタシは大人も子供も使うが、成人女性は、ワタシを目下に向かって使い、子供では対等関係で用いられているところに違いがあるとしている。ワタクシは、目上及び対等だけでなく話し手より若い人にも用いられており、上層女性では、目上または対等ではワタクシ、目下に対してはワタクシ・ワタシが使用されている。

次に、下層女性の使用する一人称代名詞として、オレ・オラ・オイラ・コチト・コチトラ・ワッチ・ワタシ・ワタクシが挙げられており、特に下層女性も公の場ではワタクシを使用するとしている。したがって、下層女性は、目上に対してはワタクシ・ワタシ、対等の場合にはオレ・オラ・オイラ・コチトラ・ワッチ、目下に対してはオレが使用されている。

また、中層女性は中ノ上と中ノ下とに分けられており、上位では成人の一人称代名詞はワタクシだけで、上層にほぼ等しく、下位では、対等でワタシ・オラ・コチトが使用されており、ワタシが含まれている点が、下層と異なっていると述べられている。

小松では、上下関係だけでなく、どの階層に属している人物がどの形式を使用しているかについても述べられているところに、特徴があるといえる。

次に、飛田（1974）は『安愚楽鍋』を資料として、人を指す語の待遇変換形式について調査、考察している。『安愚楽鍋』は明治4～5年に刊行された滑稽小説だが、牛鍋屋に集まる庶民の会話を通して開化期の世相を描いた作品であり、当時の言葉が反映された資料とされている。

飛田は、『安愚楽鍋』で使用されている一人称代名詞を和語・漢語・混種語の三つに分け、和語のわたくし・わちき（わちきたち・わちきども）・わつち（わつちども）・われ（われわれ）・おれ（おれたち）・おいら・おら・こちとらと、漢語の僕・拙・愚老（愚老ら）と、混種語のわが輩という形式がそれぞれ使用されているとしている。

それぞれの形式の特徴について、主に上下関係に着目して、以下のように述べられている。

まず、目下の者が目上の者に対して使用するのは、「わたくし」と「拙」であり、「わたくし」は町人と異人が使用しており、この二形式は敬意のある形式であるとされている。

次に、対等、あるいは目上の者が目下の者に対して使用するのは「おいら」と「僕」であり、「僕」は男性が用いていて、敬意ではなく、話し手の有り様²を示していることに特徴があるとしている。

また、目下から目上、目上から目下の両方で使用されているのは「わちき」と「わつち」であり、この二形式は共に、中立的立場の語であるとされている。その他に、「われわれ」が単数としても用いられていたとしている。

飛田は、語種からみると、和語は男女とも使用し、漢語と混種語は男性のみが使用しているが、町人・職人のグループは漢語の形式を使用しておらず、これには教養の有無が関係しているとしている。

また、祁（2007）は明治初期～明治末期における23編の文芸作品の会話文に用いられた一人称代名詞の使用数を調査し、用例から一人称代名詞の位相と待遇価値との関係を明らかにしている。祁が調査対象とした文芸作品には、滑稽小説や戯作等話し言葉を基にしたような資料から、小説のように会話文であっても再構成され、話し言葉をそのまま反映しているとはいえない資料の両方が含まれている。しかし、これらの資料をどのように位置づけるかについて言及されていない。

祁では、ワタシは男女ともに用いられる一般的な一人称代名詞であり、女性のほうが男性よりはるかに多く使用していること、アタシは女性が用いており、上層町人の用例が全体の8割を占めているとしている。また、ワシは女性より男性の使用数が圧倒的に多く、男性では官員層と町人を中心に、全階層に用いられており、女性では官員層と上層町人と下層町人で少数用いられていること、ボクは男性において知識層を中心に幅広く用いられていることが述べられている。

長崎（2007）では、明治以降の小説を資料として、ボク・キミの使用を観察しており、ボクは男性同士では早い時期からその使用が一般化され、同等あるいは目上から目下への関係の中で使用されていること、女性の使用に関しては、明治前期では限られた人物、限られた場面のみであったが、明治半ば以降に一般的に使用されるようになったと述べられている。したがって、ボクは明治では書生言葉の影響を受けて、祁（2007）の調査の通り男性知識層が使用していたが、明治以降その使用範囲が拡大していったことがわかる。

山西・山田（2008）は、アタシについて、史的変遷を概観し、現代のJ-POPの歌詞を資料としてアタシの位置づけについて考察しており、男性より女性の方が使用する一人称代名詞が限定的であるとしている。

また、山崎豊子（1973年初出）『華麗なる一族』において、男性の一人称代名詞として、「私」のほか、家庭内や親しい間の「僕」、男児の「ぼく」も多く、高齢者や政界人が「わし」を使用していることが指摘されている。この指摘から、「わし」は、年齢層が高いことだけでなく、身分が高いことを示すものとしても使用されていることがわかる。

さらに、「わたし」が一般的に使用され、「あたし」は幼さ／素直さ／なれなれしさを表現し、「わたくし」は職業上の謙虚さや社会的に注目されているという、ある意味で相反するかのような自己意識の表れであるとして、3形式を位置づけている。

山西・山田では、「実際の言語生活や世相を反映するもの」としてJ-POPの歌詞を取り上げており、現代語の一人称代名詞について考察していることから、それぞれの形式が持つイメージや規範について取り上げようとしている点で、他の論と異なるといえそうである。

最後に、役割語 における一人称代名詞について触れておく。金水 (2007) は、一人称代名詞として老人語・博士語では「わし」をよく使い、「ぼく」「おれ」は男性専用語、「わたし」は男性も公的な場面では使用するが、女性は場面に関わらず使用し、「あたし」は女性が私的な場面で使用し、これらは実際の発話に関わらず役割語として今日では広く日本人に共有され、様々な作品に利用されていることを指摘している。さらに「おいら」「あっし」等も役割語度が高く、社会階層が低く田舎者が使用する語として位置づけられているとされている。金水 (2003) は老人語の「わし」は十八世紀後半から十九世紀にかけての江戸語にそのルーツがあるとし、それが近代に近づくにつれて博士語としても用いられるようになったと述べている。また「ぼく」「おれ」も江戸時代の武家ことばから書生ことばを経て、現在の男性専用語として用いられるようになったとしている。このように、一人称代名詞は役割語としての側面も持っており、そのルーツは江戸時代に遡るとされている。

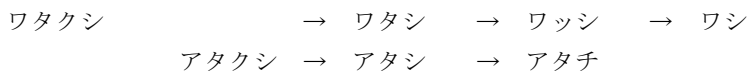
本稿では、『赤い鳥』をあくまで特定の位相の書き言葉の資料と位置づける。『赤い鳥』に掲載されている物語は子供たちが読むべきものとなるように鈴木ら作家によって書かれたものであるため、例え会話文であっても、当時の話し言葉がそのまま反映されているとはいえない。しかし、鈴木が『赤い鳥』を子供たちの手本となる雑誌として位置づけていたように、そこには当時の一人称代名詞の使用状況を受けて、それを踏襲している部分と新たな指針として異なる部分が含まれているはずである。

4 調査結果

4.1. 用例数全体の概観

調査の結果、ワタクシ (ワタクシタチ・ワタクシドモ)、アタクシ、ワタシ (ワタシタチ・ワタシドモ)、アタシ (アタシタチ・アタシドモ)、アタチ、ワッシ、ワシ (ワシタチ)、オレ (オレタチ)、ボク、ワレ (ワレラ)、ワレワレ、ヨ、の 12 形式の用例が確認された。用例総数は 2121 例であった。

このうち、ワタクシからワシまでの一人称代名詞は、『日本国語大辞典』第二版の記述も参考にするると、次のような語形変化を経て派生していると推測される。



以下に、登場人物を人間と有情物、その他に分け³、それをさらに男女に分けた⁴結果である表 1 を示す。

表 1 語形ごとの男女別用例数

() 内は%

	ワタクシ	アタクシ	ワタシ	アタシ	アタチ	ワッシ	ワシ	オレ	ボク	ワレ	ワレワレ	ヨ	総計
人・男	101 (8)		391 (31)	2 (0.2)		8 (0.6)	199 (16)	336 (27)	81 (6)	6 (0.5)	128 (10)	15 (1)	1268
人・女	37 (10)	1 (3)	89 (23)	243 (63)	1 (0.3)		10 (3)				3 (0.8)		384
人・不明	15 (25)		18 (30)				7 (12)	7 (11)		2 (3)	12 (20)		60
有情物・男			20 (17)				16 (13)	30 (25)	5 (4)				120
有情物・女	23 (26)		12 (13)	45 (50)	6 (7)		4 (4)						90
有情物・不明	20 (17)		99 (83)				11 (9)	37 (31)			1 (0.8)		119
その他			33 (41)	2 (3)			16 (20)	26 (32)			3 (4)		80
総計	196 (9)	1 (0.05)	662 (31)	292 (14)	7 (0.3)	8 (0.4)	263 (12)	436 (21)	86 (4)	8 (0.4)	147 (7)	15 (0.7)	2121

登場人物の中で、特に性別に関する記述がないものに関しては、「不明」に分類されている。なお、ワタクシタチのような単数形に複数を表す接尾辞で構成されている形式は、単数形に含め、単数形のみを項目として扱うこととした。しかし、ワレワレはタチ・ラのような複数を表す接尾辞からなる複数形とは異なるとみなして、ワレとは別に項目を立てることとした。

それぞれの形式に着目してみると、最も多く使用されている形式はワタシで 662 例使用されており、オレの 436 例、アタシの 292 例、ワシの 263 例、ワタクシの 196 例、ワレワレの 147 例、ボクの 86 例と続いている。

ワタシの用例数が多いことは、ワタシという形式が適用される使用範囲の広さからいって、自然であるといえる。また、ボクに比べてオレの使用が非常に多く、特徴的である。

話し手の属性に着目すると、人間・有情物共に男性の用例数が多いことがわかる。特に人・男の用例数が圧倒的に多く、全体の半数以上を占めている。それぞれの話者総数は、人・男が 210、人・女が 53、人・不明が 24、有情物・男が 30、有情物・女が 24、有情物・不明が 55、その他が 17 となっている。有情物等も人間同様に、擬人化されてそれぞれの一人称代名詞によってキャラクター付けされているといえる。

また、オレ、ボクは性別が不明のものを除いて、男性が使用しており、アタシもほぼ女性のみが使用していることから⁵、これらの形式は性別によって使い分けがなされていることもわかる。ワシは女性の使用も若干みられるが、やはり男性が主として用いているようである。

4.2. 形式ごとの使用者層

以下に、それぞれの用例の話し手を、人と有情物、その他で階層ごとに「上・中・下」と分類した表 2 を示す。

人では、「上」に神や王、お金持ち等社会階層の高い人物、「下」に乞食や貧乏人、百姓等社会階層の低い人物、そのどちらにも当てはまらず特に描写のない人物を「中」として分類した。有情物は「上」に人と同様に社会階層の高いものを、「下」に社会階層の低いもの、さらに物語の中で害をなす等悪く書かれているものも含め、特に記述のないものについては「中」とした。また、腰掛けや玩具等の物や植物等人にも有情物にも当てはまらないものは、「その他」に分類している。

表 2 一人称代名詞の社会階層別分類

	人・男			人・女			人・不明			有情物・男			有情物・女			有情物・不明			その他		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
ワタクシ	66	19	16	25	2	10	14	1					21	2			17	3			
アタクシ				1																	
ワタシ	200	125	66	56	12	21	9	8	1	14	6	6	6	2	91	6	1	32			
アタシ	1	1		46	177	20							5	40						2	
アタチ					1								6								
ワッシ		1	7																		
ワシ	100	47	52	2		8	2	5		2	11	3		4	9	2				16	
オレ	179	61	96						7	8	14	8			3	29	5	22	4		
ボク	21	60									3	2									
ワレ	1	5						2													
ワレワレ	118	5	5			3	4	8							1				3		
ヨ	15																				

さらに、それぞれの形式について、どのような話者が使用しているのかを、登場人物の属性を類型化して表3に示した。

表3 形式別使用者⁶

語形	作品数	属性
ワタクシ	31	(人・男・上)神、王、王子、貴族・良家の子息、天皇の息子、長官、学者、商人、(人・男・中)工場の使いの者、青年、(人・男・下)家来、百姓、蛇使い・手づま使い、おじいさん、怠け者、(人・女・上)神、王女、(人・女・下)乞食、おばあさん、(有情物・不明・中)兎・魚・蟻等、(有情物・不明・下)狐
アタクシ	1	(人・女・上)王女
ワタシ	79	(人・男・上)神、王、王子、貴族、良家の子息、聖者、僧侶、学者、教師、兵士、役人、領事、(人・男・中)青年、おじいさん、(人・男・下)家来、下男、手づま使い、おじいさん、囚人、怠け者、泥棒、(人・女・上)王妃、姫、(人・女・中)少女、(人・女・下)おばあさん、乞食、黒人奴隷、(人・不明・中)語り手、(有情物・男・中)猿、豚、モグラ等、(有情物・女・中)野鼠、牝牛等、(有情物・不明・中)犬、ツバメ、(その他・中)コスモス・モミの木等植物、手桶・腰かけ等道具、空気・日光
アタシ	35	(人・男・上)王子、(人・女・上)王女、伯爵夫人、おばあさん、女、少女、(人・女・下)おかみさん、黒人奴隷、(有情物・女・上)鴻の鳥等、(有情物・女・中)小山羊等、(その他・中)お菓子、瓶
アタチ	2	(人・女・中)少女、(有情物・女・中)鳥・兎の子供
ワッシ	2	(人・男・中)おじいさん、(人・男・下)土人
ワシ	56	(人・男・上)神、王、天皇、貴族、隠者、僧侶、学者、(人・男・中)おじいさん、おじいさん、青年、商人、(人・男・下)百姓、囚人、悪者、怠け者、黒人奴隷、(人・女・上)神、おばあさん、(人・女・下)おばあさん、(有情物・男・上)鴻の鳥等、(有情物・男・中)もぐら等、(有情物・男・下)ロバ等、(有情物・女・下)蛙(その他・中)木
オレ	67	(人・男・上)神、王、王子、貴族、良家の子息、隠者、僧侶、学者、商人、(人・男・中)兵士、おじいさん、おじいさん、青年、(人・男・下)少年、家来、海賊、人喰い鬼、巨人、小人、囚人、泥棒、悪者、怠け者、乞食、土人、黒人奴隷、(有情物・男・上)王様のライオン、(有情物・男・中)猿・犬等、(有情物・男・下)ロバ等、(有情物・不明・中)鼠・青虫等、(その他・中)玩具
ボク	13	(人・男・上)良家の子息、(人・男・中)少年、(有情物・男・中)子豚
ワレ	3	(人・男・上)、学者、(人・不明・中)町の人々
ワレワレ	20	(人・男・上)神、王、米大統領、役人、教師、(人・男・下)乞食、(人・女・下)黒人奴隷、(人・不明・中)語り手、(有情物・不明・中)雀、(その他・上)玩具
ヨ	1	(人・男・上)米大統領

これらの表をみると、ワタクシは自身が身分の高い者と、身分が高い者と話す場合にその他の登場人物が使用しているために、社会階層の高い人物とそれ以外の人物の使用がみられることがわかる。また、ワタクシでは、道具や物、植物等の使用はみられなかった。

ワタシは用例数が多いことからわかるように、社会階層の高い者から低い者、学者・兵士・家来・泥棒等様々な職業についている者、さらには動物や植物、道具等、多種多様に使用されている。

アタクシ・アタシは性別が不明のものを除いて、上述したようにほとんど女性が使用している。アタチは女性が使用している点ではアタクシ・アタシと変わらないが、幼い子供のみが使用しているところに違いがあり、この形式は幼児語として用いられていることがわかる。

ワッシは、使用範囲が狭く、おじいさんと土人のみが使用している。ワシは、女性の使用はおばあさんのみであり、他はすべて男性が使用していた。ワシも神や王等社会階層の高い人物から、囚人や悪者等社会階層の低い人物、動物等幅広く使用されていることがわかる。

オレもワタシ同様に幅広い人物に対して使用されている。海賊や泥棒、人喰い鬼や巨人等、社会階層が低いか、または粗暴な人物が目立つが、神や王、隠者や僧侶等社会階層が高く、比較的丁寧な言葉遣いをすると思われる人物も使用している点に特徴がある。これについては、後述する。

ボクは、主に男性の幼い子供が使用しており、成人男性の使用が1例のみしかみられないという点に特徴がある。

ワレは1例を除いてすべてワレラという形式で使用されており、ワレワレと同様に話者を含めた複数の人物を指す場合に使用されていた。しかしワレが神と王のように主に社会階層の高い人物が

使用しているのに対して、ワレワレは社会階層の高い人物以外にも、乞食・雀・玩具等に使用されている。

また、一人称の地の文は少なく、語り手の使用している形式もワタシとワレワレのみであった。

4-3. 形式ごとの用例とその特徴

本節より、具体的に用例を挙げながら、それぞれの形式について述べる。

〈ワタクシ〉

(1) 「では、だれでも、三晩の間、一寸も眠らないで、私 (わたくし) をお部屋の外へ出さないやうぢつと番をして見せる人がありましたら、その方のお嫁になりませう。」⁷

(1-1 「ぶく／＼長々火の目小僧 (上)」 王女→王)

(2) 「私 (わたくし) は、もと隠岐の島にをりました兎でございますが、この本土へ渡らうと思ひましても、渡る手だてがございませんものですから、海の中の鰐をだましまして、一たい、お前と私 (わし) とどつちが身うちが多いだらう、一つ競べて見ようぢやないか、お前はあんなだけの眷属をすつかりつれて来て、こゝから、あの向うの果ての、気多の岬までずつと並んで見よ、さうすれば己 (おれ) がその背中の上を伝はつて、数をかぞへてやらうと申しました。(3-3 「赤い猪」 兎→大国主神)

ワタクシは、(1) のように元々身分の高い人物がワタクシを使う場合と、(2) のように目上の人物と話しをする時に目下の者がワタクシを使う場合があることがわかる。特に(2)に示したように、兎はワシとオレも併用しており、目下の者が目上の者に対してワタクシを使用する場合には、ワタクシがその登場人物が使用する一人称代名詞の基本形でないことが多い。また、ワシとオレは聞き手となる人物はどちらも鰐であることから、使い分けられているのではなく揺れていると考えられる。このように、人称代名詞が一つに定まらず、揺れているものは、他にも多くみられた。

〈ワタシ〉

(3) 「私 (わたし) は今までうっかりして、あの有り難い予言者のことを忘れてめた。」

(1-6 「またぼあ (下)」 王→家来)

(4) 「うっかり鉄の方で掘ると大変ですよ。よござんすか。私 (わたし) が今言つたことを忘れては駄目ですよ。」(5-3 「跛の狐」 狐→三番目の息子)

(5) 「をぢさん、私 (わたし) は何にもわるいことをしに来たのぢやありません。たつた一人でさびしいから、あなたの子にして貰はうと思つてたづねて来たのです。」

(10-6 「やくそく」 乞食のような少年→貧乏な一人者)

ワタシは、(3) のように社会階層の高い者から、(4) のような動物、(5) のように社会階層の低い者まで、幅広く使用している。使用数全体の割合からみると、人に対して使用されている 498 例のうち、最も使用しているのは「人・上」に属する人物の 256 例であり、鈴木三重吉の童話作品では、ワタシは社会階層の高い人物を中心に使用されていることがわかる。また、(3) の王さまも(5) の少年も、オレを併用している。

〈アタシ〉

- (6) 「お兄さんたちが今晚かへつてみて下さらないと、私(あたし)はどうされてしまふか分りません。」(6-4「人喰人」末の女の子→兄たち)
- (7) 「蛇だよ、／＼。ほんとに私(あたし)は、あつちへ持つてき、こつちへ持つてき、どんなに困つてるか考へて御覧よ。」と、鳩は鳴き出しさうな声で言ひました。
(8-1「地中の世界」鳩→すゞ子ちゃん)

アタシは、(6)(7)と同様に、ほぼ女性が使用している⁸。また、人に対して使用されている245例のうち、最も使用しているのは「人・中」に属する人物の177例であり、社会階層が高いあるいは低い人物ではあまり使用されていない。またワタシとの併用もみられるがその数は非常に少なく、アタシを使う人物では形式の揺れがみられないといえる。

〈アタチ〉

- (8) 「おぢいちやま、あれは私(あたち)が乗ん／＼するの？」
(11-3「こしかけと手桶」女の子→お爺さん)
- (9) 「あたちもおいちい。」(15-6「ボビイとボン」ボン(小さな兔の女の子)→母)

アタチは(8)(9)のように、幼い女の子が使用している。この形式では幼児語の特徴である/s/と/tj/の交代が起こっており、アタチを使用することで、女性であるがまだ幼いということが表示され、役割語として機能していると考えられる。

〈ワッシ〉

- (10) 「わッシの叔母は、わッシにやアおふくろも同じことです。」
(12-5「ディーサとモティ」象使い(土人)→雇主)

ワッシは、場末の酒場の主人と象使い(土人)が使用しており、共に社会階層の低い男性である。場末の酒場の主人はオレの使用が最も多く、ワタシとワッシを1例ずつ使用しており、象使いはオレと併用している。ワッシは先行研究での言及がないが、ワッチの異表記とも考えられる。この形式の使用によって社会階層が低く、田舎者であることが表象されると考えられる。

〈ワシ〉

- (11) 「無論一つはお前に上げるのだ。一つは私(わし)が取つておく。それから、これを序にお前の夫人にやつてくれ。」(1-5「またぼあ」王様→家来)
- (12) 「わしは体こそ小さいが、怒つたらひどいぞ。これ、早く肉をこゝへ出せ、ぐづ／＼してみると、痛い目に合はせるぞ。」(10-6「やくそく」魔法使いのお婆さん→乞食の様な少年)
- (13) 「私(わし)が今、こんなに王子の服を着て、こゝにかうしてゐるところを、あの貧乏人町のだれかゝ来て、のぞいて見たら、どんなにびつくりするだらう。」
(14-4「乞食の王子」トムの独り言)

ワシは、人が使用している216例のうち、男性の使用が多く、中でも社会階層の高い人物の使用

が 100 例あり最も多かった。特に王様はワシを使用していることが多く、また (13) のように子供であっても王子という地位に準じてワシを使用している例がみられることから、金水 (2003) が述べているように、ワシは老人語・博士語に含まれる役割語であり、この形式の使用によって年老いていることや、威厳があり知恵や権力を有していることが示されると考えられる。ワシの使用を男女別にみると、圧倒的に男性の方が使用数が多いが、女性は年老いていたり、性格や外見が悪かったりする人物に対して使用されている。したがって女性の場合には博士語としては使用されていないといえそうである。

〈オレ〉

- (14) 「それほど欲しいものなら俺 (おれ) が買ってやらう。」 (1-5 「またぼあ」 王さま→家来)
- (15) 「おれがその驢馬を引っぱつて先に行くから、お前はあとへついてお出でよ。」
(8-4 「二人の乞食」 盲目→聾)
- (16) 「おぢいさんがあゝ言つてくるくらみだもの。おれにだつて出来ないことはないだらう。」
(17-4 「ろばのドン公」 ろばの独り言)

オレは、社会階層の高い人物から、低い人物、さらには動物まで幅広く使用されている。しかし女性が使用している例は 1 例もなく、男性が使用する形式となっている。人に対して使用されている 343 例のうち、最も多く使用されているのは、「人・上」の 179 例であり、社会階層の高い人物がよく使用していることがわかる。この形式の社会階層の高い人物の用例の中で、特に王や王子において、オレとワシ・ワタシを併用する例が多くみられる。ここからは、小松 (1987) が指摘する、「同等もしくは目下に対して使用」されるような乱暴でくだけた形式としての使用だけでなく、金水 (2003) の述べる「むき出しの鬨志や野性味を持ったキャラクター」としてのオレが使用されているといえ、ワシによる威厳や知恵・権力の保持の表象と共に、力強さや男らしさの表象によって王や王子のキャラクターが成り立っているのではないだろうか。

〈ボク〉

- (17) 「だつてお母ちやま、分つてるでせう、ほら、ぼく、ミスと一しよに出かけるとあき／＼してしまふの。」 (22-1 「青い顔かけの勇士」 トウロット→母)
- (18) 「何だ、たつたそれだけの嘘か。あはゝ、今度は僕 (ぼく) だ。」
(2-6 「大法螺」 男の子→髭のないおじさん)

ボクは、成人男性の使用はみられず⁹、男の子しか使用していないという点に特徴がある。また、社会階層の低い者は使用しておらず、中～上流階級の人々が使用している。したがって鈴木三重吉の作品では、ボクは中～上流階級の少年が使用する形式とされていることがわかる。昭和 27 年の「これからの敬語」ではボクは男子学生の用語であるとされているが、それ以上に限定的に使用されているといえる。

〈ワレ〉

- (19) 簡単な便利を得たいといふのみであると附け加へ、代理王がわれに対して何か言はうとするのを取り合わずに、それなり立ち上つて、(10-4 「日本を」 地)

(20) 「おゝ、われ等(ら)が命なるパールの神よ。」(16-1「火の中へ」へロー(学者の弟子)→神)

(19) は語り手による登場人物の発話の引用である。ワレの形式で使用されているのはこの1例のみであり、他は全て(20)のようにワレラの形で、発話者を含む複数の人物を指して使用されていた。

〈ワレワレ〉

(21) 「われは理由のない戦争は好まない代りに、われに向つて不当の攻撃を加へたものは直ちに討ち懲らさなければならぬ。」(5-4「少年王」カール王→議員たち)

(22) だからこちらの出方一つでは、改めてわれとも交際をしない筈はないと、ペリーは考へました。(8-2「日本を」地)

ワレワレもワレと同様に、複数の人物を指して使用されている。ワレワレは男性の使用が圧倒的に多く、中でも社会階層の高い人物が多く使用しているが、「日本を」という開国について書かれた作品の中で特に多く使用されており、公的な場で多く使用される形式であるといえそうである。

〈ヨ〉

(23) 日本皇帝陛下。予(よ)は予(よ)の部下の代将官、マツシユー・シイ・ペリーを特派使節に任じ、この書を陛下に奉呈します。(9-6「日本を」大統領が天皇に宛てた親書)

ヨは、「日本を」という作品の中で米大統領が天皇陛下に宛てた親書の中でのみ使用されている。この形式はその使用によって、威厳や権力を有していることを表す役割語として使用されていると考えられる。

5 まとめと今後の課題

まず、祁(2007)の調査によると、明治初期～明治末期における23編の文芸作品の会話文に用いられた一人称代名詞は全39種類とされており、鈴木三重吉が『赤い鳥』で使用している形式数が非常に少ないことがわかる。この差は、明治から大正へと時代が移る過程で、使用されなくなった、あるいはできなくなった一人称代名詞があったことや、調査対象となっている文芸作品に比べて童話に登場するキャラクターの幅が狭いことに起因していると考えられるが、その他に、『赤い鳥』を子供の手本となるべく規範的な雑誌として位置づけようとした鈴木三重吉の意図も影響しているのではないかと考えられる。特に、一見どの階層でも使用されているようにみられるワタシという形式で、階層ごとに使用数を確かめると違いがあり、このような点に鈴木三重吉の人称代名詞の使い分けが現れているのではないかとと思われる。

また、オラやオイラ等の使用がみられないことも、これと関係していると考えられる。オラは『日本国語大辞典』第二版によれば、本来は卑しい男性の使用する語であったが、江戸時代には、オレやオイラと共に江戸町人の女性も用いたとされており、現代共通語では昔話等に登場する農村部で生活する人物が男女を問わず使用している一人称代名詞であるといえる。この形式が使用されていないということは、この当時すでに現在のような「田舎者」を表象する形式として認識されており、その使用を鈴木が選択しなかったとも考えられる。

今回の『赤い鳥』の鈴木三重吉の童話作品における一人称代名詞の調査からは、現在の一人称代名詞の使用と比べて、大きな違いは見いだされなかった。これが鈴木三重吉に特有のものなのか否かについて明らかにするためには、『赤い鳥』における他作家や、同年代の作家の作品の一人称代名詞の使用状況について調査する必要がある。これを今後の課題としたいと思う。

注

- ¹ 先行研究のうち、小松（1987）、祁（2007）、山西・山田（2008）では、「自称詞」という用語が使われているが、これは「一人称代名詞」と同義であるとみなし、本稿では後者の語に改めている。また、本稿では一人称代名詞以外の、自称詞的に用いられる親族名詞や職業名等の形式は、調査の対象外としている。
- ² これを飛田（1974）は「話し手の体面」と表している。
- ³ 人間には、神や人喰鬼等も含まれている。その他にはコスモスやモミの木等の植物や机や手桶などの道具、玩具等の物が含まれている。
- ⁴ 性別の分類には、本文に記載されている男女の別や父母等の親族名、王・王女等の役職名の他、挿絵の服装や髪形等を手掛かりとしている。
- ⁵ 2例「人・男性」が使用しているが、どちらもワタシを多く使用しており、誤植である可能性が高い。また不明の2例は、瓶とお菓子の使用であり、性別は特別記載されていないが、アタシの使用によって女性として表示されていると考えられる。
- ⁶ 表の丸括弧の中は、人・有情物の別、男女の別、社会階層の順に記している。
- ⁷ 用例はすべて『赤い鳥』の本文から引用している。『赤い鳥』の本文では漢字は総ルビであるが、本稿では一人称代名詞が漢字表記の場合のみ、丸括弧でルビを示すこととする。なお用例の後の丸括弧には「雑誌の巻号」「作品名」「話し手 → 聞き手」を記載している。
- ⁸ 注5を参照。
- ⁹ 2巻1号の「ゼメリイの馬鹿」でゼメリイが16例中1例だけボクを使用しているが、それ以外ではワタシを1例、オレを14例使用しており、ボクの総用例数86例のうちの1例であることから、『赤い鳥』ではボクは男の子が使用する形式として位置づけられているとみなした。

参考引用文献・URL

- 祁福鼎（2005）「明治時代語における自称詞のスイッチングについて」『文化継承学論集』2号
- 祁福鼎（2007）「明治時代語における自称詞—その全体的様相—」『文学研究論集』26号
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- 金水敏編（2007）「近代日本マンガの言語」『役割語研究の地平』くろしお出版
- 小松寿雄（1987）「浮世風呂における女性の人称と階層」『近代語研究第7集』武蔵野書院長崎靖子（2007）「人称代名詞「僕」「君」の変遷」『川村学園女子大学研究紀要』18巻3号
- 文化庁（1952）「これからの敬語（建議）」
- http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kakuki/01/tosin06/index.html
- 飛田良文（1974）「明治初期作品の敬語」『明治大正の敬語 敬語講座5』明治書院
- 山西正子・山田繭子（2008）「「あたし」考」『目白大学人文学研究』4号

資料

- 『赤い鳥』復刻版（1979）日本近代文学館
- CD-ROM版『赤い鳥』（2008）大空社

（広島大学大学院博士課程後期2年）